

# 伝統芸能から人間ドラマを楽しむ 特別短期講座

テーマ：第4回 能『隅田』～母子の愛

日時：2023年7月12日 9:45～11:45

講師：北見 真智子 先生（大阪音楽大学講師・音楽学）



## 能の歴史・・・

奈良時代の散楽から室町中頃まで

- 源流・・・奈良時代の散楽  
滑稽な物まね芸(お笑い)  
曲伎(アクロバット)  
幻術(マジック)
- 滑稽な物まね芸だけが残り、散楽の代表芸

## 猿楽(サルガク、サルゴウ)



## 南北朝時代

鎌倉期後半には各地で社寺の支援を受けた猿楽座が作られる様になり、南北朝期(室町初期)になると、大和猿楽四座と近江猿楽六座の活動が際立ってくる。

### 大和猿楽四座

- ・本拠地は大和・・・物まねや会話の面白さが持ち味  
鬼の演技を得意とする

○円満井座(金春流) ○外山座(宝生流) ○結崎座(観世流) ○坂戸座(金剛流)

それぞれの持ち味を発揮して、力を伸ばし、諸国の猿楽を圧倒した。

その中でも、結崎座を統率した観阿弥は、従来の物まね本位の猿楽から歌舞主体の高度な舞台芸術を創出した。

世阿弥(息子)と共に京の都へ進出して醍醐寺で7日間の猿楽能を催したり、洛東の今熊野で三代將軍・足利義満が見学する中で猿楽能を催したり、以後義満の後援を受け、能楽を大成した功績は大きい。

世阿弥(息子)の功績は、数多くの能の作品を書く残し、新作も数多く手掛けた。



## 能『隅田川』

(人買いによる悲劇を素材にした作品)

作者：観世元雅 (世阿弥の子)

時：3月

登場人物

シテ：梅若丸の母 (狂女)

子方：梅若丸の霊

ワキ：隅田川の渡し守

ワキツレ：京都から来た旅の男

場所：隅田川のほとり

### あらすじ

渡し守が、客を待っていると狂女が子を失った事を嘆きながら現れる。同情した渡し守は狂女の乗船を許す。対岸の柳の根元で人が集まっているが何だと狂女が問うと、渡し守はあれは大念仏であると説明し、哀れな子供の話を聞かせる。京都から人買いにさらわれてきた子供がおり、病気になってこの地に捨てられ死んだ。死の間際に名前を聞いたなら、「京都は北白河の吉田某の一人息子である。父母と歩いていたら、父が先に行ってしまう、母親一人になったところを攫われた。自分はもう駄目だから、京都の人も歩くだろうこの道の脇に塚を作って埋めて欲しい。そこに柳を植えてくれ」という。里人は余りにも哀れな物語に、塚を作り、柳を植え、一年目の今日、一周忌の念仏を唱えることにした。

それこそわが子の塚であると狂女は気付く。渡し守は狂女を塚に案内し弔わせる。狂女はこの土を掘ってもわが子を見せてくれと嘆くが、渡し守にそれは甲斐のないことであると諭される。やがて念仏が始まり、狂女の鉦の音と地謡の南無阿弥陀仏が寂しく響く。そこに聞こえたのは愛児が「南無阿弥陀仏」を唱える声である。尚も念仏を唱えると、塚の中から亡き子の亡霊が現れるが、駆け寄る母の期待もむなしく、亡霊は消え、塚には草が生い茂るばかりだった。



泣く動作(型)・・・「シオリ」・「モロジオリ」

- こぼれる涙を抑える型
- 激しく泣く動作

(受講生全員で行う)

授業風景

(担当：千種)